

赤十字新聞

The Red Cross Journal Japanese Red Cross Society publication

編集・発行/日本赤十字社 企画広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL.03-3438-1311 一部20円

4

Apr 2010

Vol.839 http://www.jrc.or.jp



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

日本赤十字社第74回代議員会

国内外で「連帯の精神」を

平成22年度事業計画と予算を決定

日本赤十字社は3月19日、第74回代議員会を東京・千代田区の新霞が関ビル「全社協・灘尾ホール」で開催し、平成22年度事業計画と予算を決定しました。今年度の事業計画は、国内外の災害救援や復興支援、保健衛生・医療・福祉活動などの充実、ボランティアの結集を強調しています。近衛忠輝社長はあいさつで、各国赤十字社・赤新月社の連帯強化とともに、ボランティアの力を生かした活動の推進を呼びかけました。

代議員会は、日本赤十字社の最高議決機関です。各県から選出された代議員146人が参加しました。決定された予算は、総額1兆2513億円。事業計画では、国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)が昨年の総会で決定した「2020年に向けての戦略」を進めていくために「国民の理解と支援」を求めているのが特徴。具体的には、社員やボランティアのネットワーク育成、外部の市民団体や企業との協力などを提起しています。

社会のニーズに応える 日本赤十字社 近衛忠輝社長 (IFRC会長)が開会あいさつ

昨年は11月にIFRCの第15代会長の選挙を通じて世界をまわり、各国の赤十字リーダーと話す機会に恵まれました。日本赤十字社の活動には高い関心が寄せられ、指導や協力の要請も受けました。

各社の活動は、決して一国内で自己完結的に行われれば良いというわけではありません。赤十字は世界で最大の人道ネットワークです。そのネットワークとスケールを生かす時、初めて他にない強みと特色を打ち出せると信じています。実際に各国を訪問し、

ハイチ大地震の支援現場ではボランティアの結集により赤十字ならではの活動ができています。赤十字は本来ボランティアの組織。その精神と創意工夫を取り入れ、社会のニーズに定める活動こそ求められています。

日本国内では、大規模地震への備えの強化に向け、日赤救護班全体のレベルアップやdERU(国内型移動式仮設診療所)の配備を促進。ボラ



チリ大地震

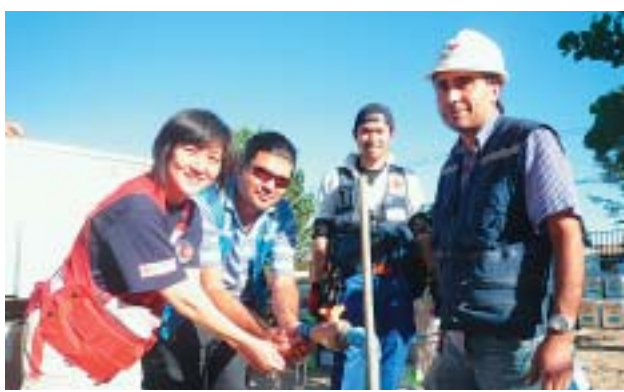
被災地の病院を支援

日本から10トンの医療資機材

本赤十字社の医療チームは2週間にもわたり、震源に近い中部のマウレ州パラル市で公立病院の再開に力を尽くしました。日赤は地震発生翌28日に現地調査のために職員1人を派遣。その後、医師や看護師、技術、事務担当、通訳による計7人の医療チームが3月11日までに現地入りしました。

今回の支援の特徴は、被災者への治療ではなく、病院が医療を再開できるように復旧作業を進めた点です。医療チームは、大型レントゲンや医療器具、ベッド、照明器具など約10トンの医療資機材を現地に搬入。公立病院のスタッフと協力しながら、同24日までレントゲンや電気設備、トイレや上下水道敷設の作業を続けました。同時に医薬品1トンを病院に提供。病院に残っていた薬と合わせて整理を手伝い、医療器具の使い方をスタッフが丁寧に説明しています。詳しくは日赤ホームページ(Url: http://www.jrc.or.jp)をご覧ください。

南米チリを2月27日にマグニチュード8.8の大地震が襲いました。全土で死者404人が出るなか、日



水道の完成を喜ぶ医療チームと病院スタッフ

日赤の支援に対し、チリ

Our world. Your move. 赤十字150年

人道の精神を若き世代へ

「デュナンが赤十字を生み出した時のことを想像してほしい」と語り、両氏



基調対談

日本演劇協会会長
植田 紳爾さん
×
近衛 忠輝社長

赤十字思想誕生150周年を記念した「赤煉瓦シンポジウム」(日本赤十字社後援)が3月16日、東京・日比谷の日本プレスセンターで開かれました。シンポジウムでは基調対談として、日本演劇協会会長で宝塚歌劇団特別顧問の植田紳爾さんと日赤の近衛忠輝社長が、赤十字の歴史や思想を若い世代に引き継ぐ大切さを語り合いました。

対

談で植田さんは、赤十字の生みの親アンリー・デュナンの生涯を描いた宝塚歌劇団のミュージカル「ソルフェリーノの夜明け」の制作や演出を手がけた経験を語りました。近衛社長は、赤十字運動の展望について触れました。

植田さんは、今回のミュージカルについて「宝塚の美しさや戦争という対極的なテーマの両立に苦労した。仮にデュナンが150年後の今の世界を見たら、各地で戦争が続く現状に憤ると想像し、その思いを作品に反映させた」と自らの思いを明かしました。作品は、序幕で歌劇団の持つ華麗さを強調することで、戦争の残酷さをいっそう際立たせる内容になっています。

植田さんは「2月の宝塚大劇場(兵庫県宝塚市)での公演は好評で、涙を流して感動される人がたくさんいらっしゃった。東京公演も、ぜひ多くの若い人に観てもらいたい」と呼びかけました。

近衛社長は、南アフリカ共和国のネルソン・マンデラ元大統領が政治犯として投獄されていた当時の逸話を紹介し、「赤十字国際委員会が収容所訪問を極秘に続けて待遇改善を求めた結果、マンデラ氏は命を奪われなかった」としたうえで、国際赤十字・赤新月社連盟会長の立場から、人権尊重を世界に働きかける「人道外交」の重要性を力説しました。

さらに、近衛社長は「人道とは、いかなる状況下でも、その人が困っているならば、中立公平の立場で助けることだ」と指摘。ハイチやチリの大地震の救援に世界の注目が集まるなか、慢性的に人命の危機に直面しているアフリカ諸国にも支援を向ける必要性を訴えました。

Information

宝塚歌劇団雪組による「ソルフェリーノの夜明け」は、4月25日まで東京・有楽町の東京宝塚劇場で上演中です。
ホームページ: <http://kegaki.hakkyu.co.jp/>

「こどものこころを育くむ親子のスキンシップ」

出口小児科医院・出口貴美子院長が訴え



「こどもの高次脳機能の発達には、大人が笑顔で接することも大切です」

幼児安全法の講師研修会



どう遊ぶかで、高次脳機能の発達段階が分かることを紹介。「自分の院内にもさまざまな玩具をそろえて、こどもの様子を観察し、診察に生かします」と話しました。

一方、幼児の事故の多くが家庭内で発生し、それが原因で脳にダメージを受けるケースが少なくないことを指摘。そのうえで出口さんは「こどもを不慮の事故から救うには、集めた事故情報を分析し、保護者や社会に事故防止の情報発信をしていくことが大切です。事故を院内にとどめておかずに、社会全体で収集・分析していく取り組みに日赤のみならずも協力してください」と訴えました。

医療機器15式を整備

競輪補助事業で

財団法人JKAは平成21年度に、日本赤十字社へ競輪公



金沢赤十字病院に配備された「生化学自動分析装置」

助金を生かし、計15式の医療機器を全国の赤十字病院に整備しました。これらの機器は、地域の皆さんの健康増進に役立てられます。

常任理事会開催報告

平成22年3月18日、本社において平成21年度第10回の常任理事会が開催されました。今回は、チリ及びハイチ大地震に対する日本赤十字社の

海外たすけあい義援金

平成21年度は6億9771万円

平成21年度「NHK海外たすけあい」の義援金総額は、6億9771万3491円となりました。義援金は、アフガニスタンなどの紛争犠牲者の支援やアフリカ諸国へ

活動、医療施設耐震化臨時特別交付金の決定状況、青少年赤十字事業、平成22年度広報計画、予算の補正にかかる2月分の社長専決事項の決定状況について、それぞれ報告しました。

ボランティアスピリットの普及(青少年赤十字・奉仕団)



埼玉県内のJRC加盟校の募金活動。子どもたちの自主性を育てることが大切

青少年赤十字(JRC)加盟校は1万1000校、メンバーは270万人を超えました。求められるのは、その活動内容の充実です。

一人ひとりのいのちと健康を大切にすることを実践活動に向け、指導者やリーダーの研修会、モデル校(全国で10校を指定)への支援、国際交流の推進などを進めます。

一方、地域の赤十字奉仕団は、高齢化による団員減少などが課題。その活性化に不可欠なリーダーを育成する研修会を引き続き実施します。また、他の奉仕団の参考になる実践活動をまとめた報告集を作成し、モデル活動の普及を図ります。

ネットやメディアで基盤強化(社資募集・広報活動)



ケニアを訪れた赤十字広報特使の藤原紀香さん

赤十字社員が納める「社費」と一般からの「寄付金」の両方を合わせた「社資」は、年々漸減傾向。平成18年度からは社費の口座振替やインターネットを利用した寄付金受け付けなどを進めてきました。今年度は、これらの新しい寄付金募集方法をホームページなどを通じて引き続き広報し、その普及に取り組みます。

また、赤十字の活動へ国民からの参加と協力を得るには、活動への理解と信頼が不可欠です。今年度も、赤十字広報特使の藤原紀香さんにさまざまな場で赤十字について語っていただくほか、メディアを通じた情報発信、「赤十字150年キャンペーン」(平成21~25年)に取り組みます。

国民の中に赤十字運動を

いのちと健康を守る

地域医療の中心的存在に(医療事業と看護師教育)



専門職としてのキャリア開発も進めます

医師不足や勤務医の過重労働など、地域医療の崩壊が社会的な問題となっています。そうした中で、全国の赤十字病院は地域の中核病院として、医療機能の分担及び連携を進めるとともに、公的医療機関として救急医療や災害医療、周産期医療などに取り組み、地域医療を確保するために最大限の対応を図っていきます。

また、赤十字らしさを求めた運営改善に取り組み、国内外の医療救済や災害救護活動の拡充を図ります。

少子化などの影響で、看護学校への入学志願者が減少し、看護学生の確保が課題になっています。また、看護師の確保も喫緊の課題です。そこで、全国規模で広報活動を強化します。さらに病院でも、就労時間短縮や育児短時間勤務制度を導入し、働きやすい職場環境を整えます。

献血者確保と安全向上の追求(血液事業)

少子高齢化のなか、病院などで使われる血液製剤の安定供給は特に重要な課題。今年度は、献血協力者516万人(202万リットル)を計画しています。その実現に向けた取り組みとして、献血ボランティアなどによる若年者対策、年齢層に応じた啓発活動、「LOVE in Action プロジェクト」をはじめとした献血キャンペーンなどを推進します。



仙台でのLOVE in Action プロジェクトには、楽天イーグルス・山崎選手、ベガルタ仙台・平瀬選手も参加

安全対策では、輸血用血液製剤を介した感染症を防ぐために、新たな技術の導入などを検討。アジア地域の血液事業の発展に向けた協力事業も展開します。

いのち輝く世界が 私たちの使命

平成22年度日本赤十字社の事業計画概要

「人間のいのちと健康、尊厳を守る」という赤十字の原点に立ち返った活動が今こそ求められています。紛争や災害地での救護・人道支援のニーズは年々拡大。日本でも、安全な医療の提供や高齢者支援などその責任は大きくなっています。平成22年度、日本赤十字社は総合力を発揮した取り組みを国民の理解と参加を得て展開していきます。

国内外の人道支援を強化

国際赤十字の主翼を担う(2020年戦略)

国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)は、昨年11月の総会で、今後10年間の方向性を決める「2020年に向けての戦略」を採択しました。

戦略は「私たちは何者か」「私たちは何をすべきか」「私たちはどのように行動するのか」の三部から構成されています。弱者の生活を改善するという使命を踏まえ、災害復興支援、保健医療活動、気候変動による災害の予防、人道問題に対する関心喚起などを進めつつ、各社が国内体制を強化することを定めています。

総会では、近衛忠輝社長がIFRC会長に選ばれました。日赤はさらに国際赤十字の活動に貢献し、その活動の成果を国民に伝え、理解と支援を得るよう努めます。



Spirit of Togetherness=連帯の精神で世界中の赤十字はつながっています

世界中の苦しむ人を救う(国際救援活動や開発協力)



ハイチの仮設診療所で被災者を診察する日赤スタッフ

世界では、地震や洪水、干ばつなどの自然災害が各地で発生し、多くの命が失われています。HIV・エイズなどの感染症拡大も深刻です。

日赤は、ハイチ大地震の被災者支援に全力を挙げ、中国大地震やミャンマー・サイクロン被害の復興を引き続き支援します。保健衛生の分野では、ケニアやウガンダなどアフリカ諸国を中心に、中長期的視野に立った疾病予防や健康増進を実施します。

また、救急医療体制が整わない国を対象に、救急法の普及活動を財政・技術の両面で支えます。今年度は東ティモール、カンボジアなど4カ国の赤十字社・赤新月社の取り組みを助けます。

緊急時の備えを万全に(国内救護)



dERUはすでに本社と17支部へ配備完了

災害時の救護活動は重要な任務です。

日赤では東海地震に備えた災害救護訓練を行っています。今年度は、各支部がこの案に基づいた、訓練を実施。首都直下地震や東南海・南海地震についても同様に対応していく予定です。

災害救護スタッフの育成も課題です。救護班のレベル向上を図る研修会について、職員が受けやすくなるよう実施回数を増やし、災害時における「こころのケア活動」の研修も支部単位で充実させます。救護活動の拠点となる移動式仮設診療所(dERU)は、新たに長野県支部などに備える計画です。

いのちを守る知識と技術(救急法等の普及)



健康生活支援講習は介護する側、される側、両方の立場で学ぶのが特徴(兵庫県支部の講習会)

いざというときに備えて心肺蘇生法やAED(自動体外式除細動器)の使い方などを学ぶ講習は、誰もが参加できる赤十字の身近な取り組みです。ホームページを通じた情報提供の充実や、全国でAEDの使い方を学ぶイベントなど救急法の普及に努めています。

平成21年度からスタートした健康生活支援講習の一層の普及に努め、今年度は全国で約8万人を対象に講習を実施。また、各講習の指導員として活躍できるボランティア指導員の養成も引き続き支部単位で充実させていきます。



◎誰でも参加できる赤十字の講習

講習名	学べる内容	平成20年度の講習回数と受講者数
救急法	日常生活の事故防止や救命・応急手当	1万2908回 44万9259人
健康生活支援講習(日家庭看護法講習)	健康増進や高齢者支援、家庭での介護法	2565回 7万9752人
幼児安全法	こどもの事故防止や病気への対応のしかたなど	2596回 6万3890人
水上安全法	水の事故から人命を守る泳ぎの基本と救助法	1110回 5万281人
雪上安全法	雪上での事故防止と救助・手当の方法	33回 363人

互いに支えあう地域社会へ(社会福祉事業)



親子の元気を応援(岐阜県支部のすくすく子育てサポート講習会)

今年度は、特別養護老人ホーム利用者の介護状態の重度化、認知症高齢者の増加などを踏まえ、より質の高いサービスの提供や施設運営の充実を重点に実施します。

親の育児不安や虐待が表面化するなか、子育て支援事業の社会的ニーズは高まっています。奉仕団をはじめ地域住民や行政と連携し、子育て支援を推進していきます。

東京・広尾に総合医療福祉サービスの拠点整備を行う計画を進めています。日赤医療センター、日赤看護大学と連携した老人保健施設や特別養護老人ホームなどの複合型施設を整備するもので、10月には工事着手の予定です。

青少年赤十字のメンバー 学びの春体験

「救急王」目指し分 コンテスト 大

大分県支部は2月11日、青
少年赤十字（J
RC）の加盟高
校による救急法
コンテストを開
催しました。

コンテストは
今年で3回目。

県内7校から15
チーム45人が参
加し、1チーム
3人の団体戦で
実施されました。

競技は、筆
記形式の「目指
せ！知識王」、心
肺蘇生法の「命
を救え！救命の連鎖」、
頭や腕などへ包帯を巻く「三
角巾リレー」の3種目。高校
生たちは日々学んできた成
果を発揮しようと奮闘しまし
た。



真剣なまなざし

結果は、県立大分上野丘高
校のチームが優勝。メンバー
にはトロフィーと賞状が贈ら
れました。参加者の一人は来
年は近隣の学校にも声をかけ
て参加したいと話していま
した。

視覚障害の 現状を学ぶ 静 岡

静岡県内のJRC高校生又
ンバーらでつくる協議会が2
月14日に開かれ、約50人が視
覚障害について学ぶ機会が設
けられました。

目的は、視覚障害を持つ人
たちと接する場合の心構えを
知ること。この日は、県点訳
赤十字奉仕団の7人を講師に
招き、各校の担当教諭とともに
点字器の使い方方を体験しま
した。



点字を勉強

百人参加 赤十字祭り 広 島

3回目となる「熊野町赤十
字祭り」が3月6日、広島県
熊野町の町民会館で開かれ、



世界の赤十字を紹介するこどもたち

国際交流の場も設
けられ、インドネシ
アに伝わる踊りやし
ゃんけんを楽しみ、
回国では学校に通え
ないこどもたちが多
くいることも学びま
した。体験学習のコ
ーナーでは、車いす
や手話、点字、救急
法を体験しました。

JRCに加盟する保育所や各
学校などから約100人が参
加しました。
祭りでは活動報告が行わ
れ、保育所の「ひかり学園」
は困っている友達への接し方
を事例にし、かわいい歌声も
披露しました。

赤十字の現場から



15歳のときから赤十字ホ
ランティアに参加し、障害
者スポーツに触れたことが



きっかけで理学療法士の仕
事を選びました。今は、京
都青年赤十字奉仕団の一人
として、若い人たちに日

V・エイズの予防を呼びか
ける活動を続けています。
奉仕団では、京都第一赤
十字病院の専門医の先生か



ら後押しを受け、予防の呼
びかけに「ピア・エデュケ
ーション」というプログラ
ムを取り入れています。こ
のプログラムの参加者は、

「これからは街で困っている
視覚障害者を見かけたら、積
極的に手助けしたい」と話し
ていました。

若者にHIV・エイズ予防を呼びかけ

「コミュニケーションの大切さ伝えたい」

京都第一赤十字病院
理学療法士 佐藤 文寛さん

HIVやエイズの基礎知識
をクイズや話し合いなどを
通して学んでいきます。そ
して僕たちは、「パートナ
ーの気持ちをくみ取ってコ
ミュニケーションを図るこ
とが大切です。そのことがう
れ、全国各地で活動を
することにやりがいを感じて
います。
HIVの問題は性にかか
ります。この活動を始め
て5年が過ぎても、人前で
くれます。そのことがうれ
しくて、全国各地で活動を
することにやりがいを感じて
います。
実は、日本は先進国で数
少ないエイズ発症者が増え
続けている国です。HIV
感染者は、僕と同じ20歳代
から30歳代前半の若者が占
める割合が高くなっていま
す。僕たちの活動が新たな
感染者の減少にすぐつな
がることは言い切れませんが、
若い人が性について真面目
に話すことができる人間関
係、安心して相談できる場
をさらに増やしていきたい
と思っています。

陸から空から

万全の救護態勢

列車事故想定 の合同訓練 千 葉

千葉県支部は2月18日、県
内の赤十字組織が合同で参加
した災害救護訓練を行いました。



列車内でも迅速に対応

訓練は、JR成田駅付近の
踏切で「大型列車」と列
車が衝突し、乗客から多数の
けがが発生した」との想定
で実施。想定は参加者には事
前に知らされず、実践さなか
らとなりました。
この日は、日赤DMATが
出動して、列車
内に入ってけが
人を負傷の程度
別に分けるトリ
アージを実施。
参加者らは、負
傷者に現場で応
急処置を施し、
成田赤十字病院
へ搬送する流れ
を確認しまし
た。県支部は、
現場の様子をラ
イブ画像で把握
できるシステム
を所有して
いる赤十字
飛行隊群馬
支隊を支え
る目的で創
設。団員16
人が活動中
です。アマ
チュア無線
奉仕団など
と、日常的

救援ヘリを支 える奉仕団 馬 群

群馬県赤十字飛行隊支援奉
仕団は3月4日、県内の大規
模地震発生を想定したヘリコ
プター飛行訓練を実施し、県
支部や各施設との連携を確認
しました。



ヘリとバイク隊の呼吸はぴったり

を活用して情報を収集。成田
赤十字病院は、外国人の負傷
者への通訳支援なども行いま
した。
この日の訓練は渋川市内の
ヘリポートを拠点に実施。支
援奉仕団は3機のヘリコプタ
ーの着陸を誘導し、人員や医
療資機材の搬送をサポート。
ヘリで運ばれた医療資機材
は、バイク隊の手で原町赤十
字病院（東吾妻町）などの災
害拠点病院に運ばれました。



元IFRC財政委員
野々山忠致さん

3年前に上梓した『人道支援』（集英社新書）が静かな反響を呼んでいます。「出版の話があった時は、『売れませんが』と編集者の方に言ったんですが、誤算でした」と笑います。外務省に勤務し、駐ノルウェー大使などを歴任。退官後、日本赤十字社の推薦で国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）の財政委員を8年間務めました。「『個人の尊重』の理念をはじめ人道支援の原則、赤十字の基本原則については、IFRCの仕事のなかで学びました。各

国の赤十字やNGO、難民の人たちの話を聞く機会に恵まれたので。」「被災者の苦痛の軽減を第一に考える」という原則に立つならば、テントはすぐに避難民に配るべきでした。しかし当時、私の意識は日本という国の方を向いていて避難民には向いていなかったのです」

追放され、ヨルダンのアンマン空港周辺は避難民であふれかえる事態に。日本政府からも救援用のテントが届きました。しかし、日本の支援をPRする奇贈式のために、テ

「善意だけで支援現場に行っ

クロースアップひと



余韻のなかで記念撮影（徳島）

宝塚歌劇団のミュージカル「ソルフエリーノの夜明け」に胸熱く

兵庫県の宝塚大劇場を訪れ、デュナン役の雪組トップスター・水夏希さんらの熱演を鑑賞。団員からは「素晴らしい劇でした。赤十字誕生のルーツがよく分かりました」との感想が寄せられました。

また、徳島県赤十字有功会（住友俊一会長）の33人も3月1日、研修旅行の一環としてミュージカルを鑑賞。会員のなかには、感動のあまりに涙する人も見られました。ミュージカル終了後は、アソシエイト・デュナンの人柄がよ

く分かった」との声が上がっていました。

「ソルフエリーノの夜明け」の観戦ツアーが各地で行われ、参加者は感動にひたりました。

また、徳島県赤十字有功会（住友俊一会長）の33人も3月1日、研修旅行の一環としてミュージカルを鑑賞。会員のなかには、感動のあまりに涙する人も見られました。ミュージカル終了後は、アソシエイト・デュナンの人柄がよ

神戸赤十字病院の西村尚美看護師が2月26日、兵庫県知事の井戸敏三支部長を訪れ、フィリピンの保健医療支援活動を報告しました。



井戸支部長に報告する西村看護師

赤十字運動に自覚と誇りを

「赤十字新聞」では、野々山忠致さんの連載「個人の尊重と赤十字運動」を次号5月号から開始します。

「赤十字の皆さんは、直接的であれ間接的であれ、すべて『人のいのちを救う』『人間の尊厳を守る』ことにつながっている。そして、そのことが対人地雷禁止条約の成立などにみられるように『人間が人間として尊重される社会』の実現に大きな役割を果たしている。そこそこへの自覚と誇りを忘れないでいただければと願っています」

心からの寄付に感謝

救援金にカーカードを添えて



フランス語のメッセージも書きました

JRC加盟校の高松市立屋島西小学校が3月5日、ハイチ大地震の救援金5万7616円を香川県支部に寄付しました。救援金には、6年生児

童がフランス語で書いたメッセージカード41枚が添えられました。「元気を出して」との願いが込められています。児童会会長の伊村健斗さんは「自分たちができることを考えました」と話しています。カードは3月23日に日本を発つ日赤医療チームに託されました。



小林充理事長ら組合の皆さん

2月16日、創立60周年記念事業として、沖繩県支部に100万円を寄付しました。同社は経営理念の一環として寄付を続けており、これまでの総額は2000万円に及んでいます。寄付は、地元の社会福祉協議会など11団体に活用されています。

災害救護用毛布を贈呈 三重県社交飲食業生活衛生同業組合が3月1日、災害用救護毛布182枚を同県支部に贈りました。組合は昭和48年から加盟店

創立60周年を記念して 石油・ガス供給会社「りゅうせき」（金城克也社長）は

Voice & 懸賞クイズ

「Voice」の掲載開始から1年。これまでに多くの方々が応募とご意見が寄せられました。ありがとうございます。今後とも充実した内容を読みやすい紙面作りを目指します。ご愛読よろしくお祈りします。

◆無医地区の巡回診療を知ってー磯貝弘さん（西尾市） 40年も続けてきた間には苦労もあつたと思いますが、これからの地域医療を支えてほ

◆「クロスアップひと」工藤投手に感動ー佐藤敬さん（流山市） 社会福祉への関心が高い工藤投手。強さの内側にある優しさを感しました。

◆「Voice」と懸賞クイズの応募方法 クイズ問題①の解答にご意見や感想を添えて、はがき、FAXまたはメールでお送り下さい。今月号の応募締め切りは4月22日（木）必着です。お名前、連絡先（住所、電話番号）を明記して下さい。なお、「Voice」に

4月号懸賞クイズ 問題①国際赤十字・赤新月社連盟が昨年の総会で決定した戦略の名称は？ 答え □□□□年に向けての戦略（数字4文字） 問題②ハイチの人々が話す現地語は？ 答え □□□□語（カタカナ5文字）

★今月号のプレゼント 海外の赤十字グッズ（フライングディスク）2名様に 〈応募先〉 メール kohn@jrc.or.jp

3月号の懸賞クイズの答え 問題① フライトナース 問題② RFL 当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

インタビュー INTERVIEW

ハイチ大地震



「かわいそう」と言わせない強さに望み

ハイチ大地震の被災者支援を続けている日本赤十字社の医療チームに、以前からハイチと向き合ってきた「ハイチ友の会」の内科医、小澤幸子さんが加わりました。小澤さんの目に震災後の現地はどう映ったのでしょうか。

街の崩壊にショック

首都ポルトープランスの西方にあるレオガン。支援団体「ハイチ友の会」代表として昨年11月にも訪れ、慣れ親しんできた街は跡形もなく崩れ去ってしまいました。来たときはいつも泊まっていた修道院も、一階部分がつぶれて



「被災者に寄り添う気持ちで接しました」

●日赤医療チームに参加
小澤 幸子 医師



無残な姿をさらしていたのです。「まるで空爆でも受けたのかと錯覚するほど。とてもショックでした」小澤さんを含む医療チームは、1月26日に第1班としてハイチ入りし、約1カ月間滞在。ポルトープランスやレオガンの仮設診療所で患者を診察し、現地のクレオール語を話せるスタッフとして活躍しました。診療所には、震災のショックで不眠などの精神的不調を訴える患者さんが多く訪れたそうです。「私は最適な治療として、薬に頼るよりも会話を丁寧に重ねて安心してもらおうと考えました。私がクレオール語で診察することで、患者さんにとっては心の安定を取り戻すきっかけが作れたと思います」

医師を志した出会い

小澤さんは文学部の学生だった1994年にハイチを初めて訪問。病院の悲惨な光景を見て、

医師になることを志しました。「病院には診察待ちの患者が列をなし、順番が来ても粗末な床に寝かされるだけ。薬や機器もなく、医師は何もできずにいました。私はこの状況を変えることを人任せにできないと思ったのです」その後、6年越しで医師になり、山梨県内の病院に勤務。95年に発足させた「友の会」では教育や農業などを通してハイチの支援を続けてきました。「今の私があるのはハイチとの出会いがあったからこそ。ハイチの人たちが苦しんでいるのに、医師として何もできずにいることがもどかしかった」それが、日赤医療チームに参加した理由でした。

赤十字で学んだ支援

小澤さんは日赤医療チームのスタッフを「苦労を分かち合えた仲間」と振り返ります。「チームの皆さんは、懸命に治療に当たりながら被災者に敬意を払い、現地に溶け込もうと努力していました。赤十字の組織力や機動力の高さを身をもって知ることができたのも貴重な経験でした」避難民キャンプの予防接種に出かけたある日のこと。前日に降った雨の影響を心配した小澤さんに、被災者は平然と「神様のすること」と答えたそうです。「ハイチの人たちは、安易にかわいそうと言わせない誇りを持っています。だから、仕事やチャンスさえあれば前を向いて歩いていけるはず。そのことを念頭に置いて支援することが大切だと感じています」

明日を信じて

日赤 in ウガンダ

フォトジャーナリスト 今岡昌子



アフリカ東部に位置し、ナイル川の水源であるビクトリア湖に接する国、ウガンダ。首都カンパラからサバンナの草原地帯を横目に未舗装の幹線道を車で6時間揺られた先に人口30万人の北部の中心都市グルがある。小さな診療所で出会ったHIV

に母子感染した親子。8カ月の女児の姿が今もなお、鮮明に残る。「母親には言語障害があり、言葉を十分に話すことが出来ないので」。担当医師の説明に言葉を失った。将来この母子にいかなる至難が待ち受けるのか。



日本赤十字社はウガンダ赤十字社と協力して、今年1月から女性が安全に出産、養育できる環境づくりに取り組み始めた。現地に赴任して間もない名古屋第二赤十字病院の助産師である高井久美子は、その活動を語る。「妊産婦を対象にして、安全な出産に最低限必要なもの、具体的にはへその緒を切断するカミソリ、外科用グローブ、せっけんなどの医療器材を配付します。地域の保健師や赤十字ボランティアが村々を巡り、住民に出産に関する知識を普及する活動などを支援していくつもりです」母子保健の大きな妨げになったのは、ウガンダ北部で20年近く続いた紛争であることは、紛れもない事実。日本から遠く離れたこの地で実感した“命の不平等”、あまりにも深刻な現状に目を覆いたくなる。しかし、私たちの誰かを思う気持ちをカタチにした支援は、親子が幸せに暮らせる瞬間に向かい、確実に歩みを進めていた。